

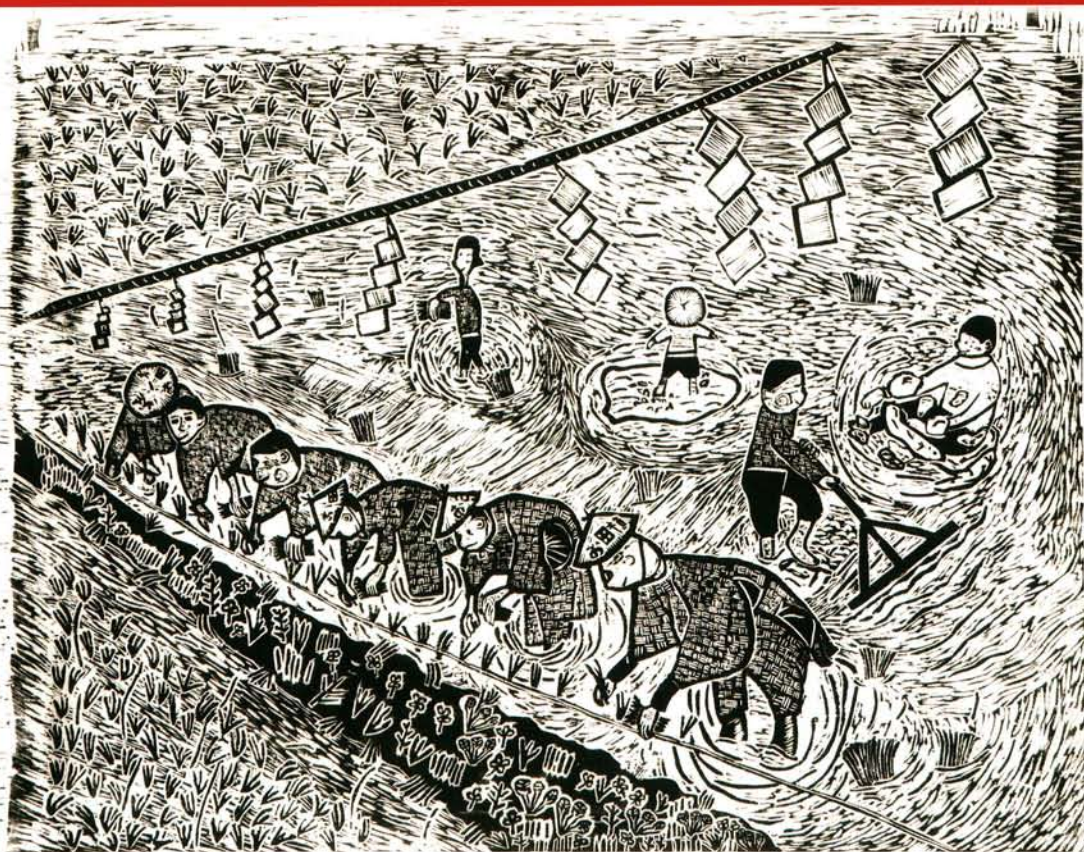
杵乃杜

秩父神社社報
杵乃杜(ははそのもり)

第 39 号

平成21年7月20日
(川瀬祭)

杵祖霊社創建記念



去秋の秋

佐渡に果立ち

朱鷺の群れ

つばきしぐさ

夏空を舞ふ

稲のまつり 秩父の早春譜

秩父神社の特殊神事「田植祭」が今春めでたく埼玉県の無形文化財に指定されました。やはり市内上蒔田の棕神社で今に伝わる「蒔田のお田植」と一緒に県文化財となりました。上蒔田では毎年三月三日、当社では四月四日、いずれも田植時に先立って予祝の祭です。

古代から稲作の盛んな近畿・東海から九州にかけては田遊びの神事がしきりですが、関東から東北に及んでは、古来の田植神事を伝える土地は数えるほどしかないのです。県内でも、今では稲作の盛んな県南には見当たらず、荒川上流の秩父と蒔田の田植祭がたった二つの例なのです。おそらく古代に逸早く墾田が成された知々夫の国の証拠です。

「豊葦原の瑞穂の国」と日本の国柄を誇ってきた先人たちは、稲のイノチこそ神々の恵みとして、その豊かな稔りを神々に祈りつつ、年ごとの田作りに勤んできたのです。

まず里山に咲く田打ち桜に山の神を宿して田んぼの水口に迎え、田起こしから苗代づくり、早苗を水田に植えつけるまでの細かい所作を丁寧に演じて、田の神に豊作をお祈りする。

こうして春に山から迎えた田の神さまを、豊作に感謝して再び山にお送りするのが秋の祭。この山里に今も伝わる二つの田植神事こそ、晩秋の秩父夜祭に結実する早春譜なのです。



解説 秩父神社 (38)

権福宣 甲田豊治

◆ 水にまつわる社殿彫刻

今回の社報では、夏号に因み「水」をテーマにお届けしている。

荒川の源流である秩父地方は、古くから人々が定住し、生活する中から独特の水の文化を培ってきた。当社の年中祭祀もまた「水」にまつわる神事であると言える。

春には、山の神が水に姿を変え里に降り、里人の生活を潤し、豊作の予祝を祈る御田植祭からはじまる。鳥居前には、中町鎮座の今宮神社より水神様を遷した水幣と水神の象徴である藁の龍が飾られ秩父の里に春が訪れる。

夏の神事は、諸々の悪疫から荒川の清流によって浄められる川瀬祭である。当社祭神の妙見様に縁ある宮地の廣見寺が伝える「廣見寺記」には、宮地の音霊の主であった龍（妙見様の化身）が土地を譲り、荒川に鎮まり潜つたと言う説話がある。そこは「妙見淵」と呼ばれ、川瀬祭の神輿洗いの斎場として伝えられている。まさに「水」の神事である。さらに、季節は秋の収穫を終え、冬を迎える。年に一度の大祭「秩父夜祭」には、春先に山から里に降りてきた水の神（藁の龍）を行列の先頭の大樽に結び、お花畑の斎場へと向かう。冬には再び山に籠ってもらうためにお送りする秩父の四季の締めくくりに神事でもある。このように、一年の祭祀は水に



許 由

始まり、水に終わると言える。

社殿彫刻もまた水との関わりが深い。現社殿は徳川家康公により妙見宮として寄進され再建した社殿である。妙見に関連して言えば、妙見は北辰北斗の神すなわち北を司り、五行説の木火土金水に当てると、北は「水」を示す。まさに御祭神と水のつながりを見ることが出来る。

さて社殿をご覧戴くと至る所に波の彫刻類が目に入る。これは社殿自体を火難から護る意味で施されているのは言うまでもない。また瑞垣も同様に本殿を囲むように波と水鳥、花などが施されている。

以前紹介した「琴高仙人」・「飛龍」・「亀仙人」(黄案仙人)・「鯉の滝登り」など水に関連する有名な彫刻類も多い。前回の編集後記で少し触れた社殿北面脇障子の「許由と果父」の彫刻も額川という地にながれる額水という清流を舞台に登場する賢人であった。

そして今回、水は水でも天空に流れる「天の川」に関連した彫刻「張騫」を取り上げてみたいと思う。その彫刻は、東側の拝殿と幣殿の境

に位置し、虎ノ門脇より見上げることができる。その姿は、波間に浮かぶ朽木に乗り、竹と見られる竿を手に、舵を取っている様子である。名は張騫または、張博望とも言われている。

余談であるが、杉原たく哉著『中華図像遊覧』によれば、この張騫図が江戸城本丸に描かれていたと言う。万治二年（一六五九）創建の江戸城本丸に狩野常信により描かれ、その後火災焼失に遭い、弘化二年（一八四五）本丸再建にあたり再び狩野常信により描かれたと言う。この張騫図、描かれた場所とはなんと刃傷沙汰で有名な「忠臣蔵」の松の廊下の奥にある竹の廊下との仕切りの杉戸絵に描かれていたと伝わる。大変興味深く、実際にあった配置など詳しく調べ、別の機会に報告したいと思う。

さて、本題に戻り、人物像であるが、張騫は実在した人物で、中国前漢代の政治家であった。当時漢では、北部に位置する匈奴軍の侵略を警戒し、近隣の匈奴に敵対す



果 父



張 騫

る国々と同盟を結ぼうとした。匈奴から大敗を喫した北西部に位置する大月氏への同盟使節団の代表として張騫が選出されたのである。だが、途中匈奴軍に捕らえられ、十余年あまりも拘留されるが後に脱出に成功。なんと大月氏に辿り着くが、同盟を拒否され敢え無く漢に戻る事となる。しかし、同盟は実を結ばなかったものの、この道のりは無駄ではなく、西域の異文化と交流・交易を知る貴重な情報となり、後世には大変価値あるものとなったと伝わっている。

実在した張騫は以上述べたとおりである。しかし、日本に伝わった張騫は、流水に乗って河を遡って行くど何時しか天の川に辿り着き、牽牛織女に出会うという別の説話で伝わっていたのである。続きは、次回の夏号に掲載する。

『柞祖霊社』御鎮座の由来

宮司 蘭田 稔

本社は、ご祭神として幽冥の大神をはじめ、当社の神葬祭をもって奉斎する各ご家庭代々の御祖達のご分霊を共に招き祀つて、未永く鎮め奉る祖霊社として新たに創建されました。

ご社殿につきましては、信濃国安曇野（現・長野県安曇野市）に鎮座の古社、旧国幣小社・穂高神社が本年五月九日に斎行された式年造替遷座祭に伴なう旧神殿遺構を新材に譲り受け、そのご神縁を蒙りつつ然るべき改修をほどこして建立したものであります。

なお本社のご社名は、当社の社叢に古く伝わる名称「柞の杜」に鎮座の故であります。

因みに本社ご創建につきましては、去る平成十七年帰幽の故千嶋文曹翁命が生前に奉納された建設基金をはじめ、当社大総代、立正佼成会秩父教会ご有志ほか篤志の皆さまによるご浄財あつての成就と、ここに銘記してご芳志のほど衷心より御礼申し上げます。

世々の祖のみかげわするな 世々の祖は

おのが氏神 おのが家の神

本居宣長大人詠歌

吾らが神道におきましては、亡き人びとの御魂を未永く現世に祀りつづけることこそ後生の安心と心得て、ご遺族をはじめ縁者の方々と共に鎮魂の神祭をご奉仕しております。

幸いに本社の創建が叶いましたからには、各ご家庭それぞれの御霊屋奉斎に併せて、当本社のご霊前鎮祭をも行く未永くご奉仕いたすことを慎んでお誓い申し上げます

柞祖霊社奉納者御芳名

特別奉納

千嶋文曹

手水舎奉納

秩父神社大総代

井上 久

富田 孝

特別崇敬者

春日燈籠奉納

松本眞一

鳥居奉納

立正佼成会秩父教会

小池 清

内藤 貴士

磯田 欣央

清川 武

設楽 好一

新井 廣枝

金子 保男

浅見 修一

新井 五郎

江尻 康雄

森田 岡次郎

高橋 広安

黒澤 功次

井上 公子

秩父支部三地区有志一同

秩父東支部四地区有志一同

西秩父支部有志一同

横瀬支部有志一同

御内陣装飾品奉納

井上 幸男

ふくろうの会

堤 央子

鈴木 一巳

浅賀 克彦

井上 友治

小池 菊夫

佐野 照吉

新井 幸栄

竹内 晴久

阿保 一男

竹内 善吉

浅見 浩司

雨宮 梅吉

浅見 喜男

小池 一嘉

秩父支部四地区有志一同

影森支部有志一同

皆野支部有志一同

宮前 洋一

齋藤 楓男

萩原 コウ

武石 福太郎

千島 福太郎

大澤 利一

新井 康友

柴崎 宏良

根岸 英雄

嶋崎 政雄

山中 敏雄

高橋 敏毅

幅下 福太郎

大月 久男

内山 浩位

島崎 勝三



柞祖霊社全景



今回の表紙絵画は、東京都杉並区にお住まいの富田理樹君（小学校六年生）の作品を掲載させて頂きました。富田理樹君は、当社大総代横瀬町の富田孝様のお孫様であり、富田家から毎年提供される水田において例年六月に斎行されます神饌田御田植祭には、毎年参列され、祭典終了後に行われる実際の田植えにもご奉仕戴いております。

神饌田に張り巡らされた注連縄、田植え奉仕者の様々な表情や動作、また菅笠の文字や装束の柄の繊細さ、更に田んぼの畦に生える植物の種類など細部にわたり極め細やかに表現された版画です。

まるで田園に吹く初夏の爽やかな風を感じさせるかのような作品となっております。

【表紙絵解説】

題詠「つばさ」

去年の秋 佐渡に巣立ちし 朱鷺の群れ
つばさもしるく 夏空を舞ふ

本紙の表紙に記したこの和歌は、蘭田宮司が去る六月六日に川越市内の古利、養寿院の庭園で盛大に開催された「曲水の宴」に招かれて、その際にあらじめ求められた歌題の「つばさ」を詠んだものです。

この歌題は、今年のNHKテレビで川越を舞台に毎朝放映されている連続ドラマ「つばさ」に因んで選ばれたもので、川越市長など数人の地元名士とともに当社の宮司も来賓に招かれてこの和歌を披露しました。

宮司の解説によりますと、難しい歌題でしたが、学名でニッポニア・ニッポンという我が国の国鳥である朱鷺が国内で絶滅し、中国で生息する朱鷺を譲り受け佐渡で人工増殖に成功した十羽の成鳥を、たまたま昨年の秋に秋篠宮ご夫妻の御手づから放されたことが大きな話題になり、今ではその九羽が元気に佐渡や新潟県内で生息していることを喜び、この日本の初夏の青空をつばさも鮮やかに舞う様子を、祈りを籠めて言祝いだとのことでした。



【表紙絵解説】

今回の表紙絵画は、東京都杉並区にお住まいの富田理樹君（小学校六年生）の作品を掲載させて頂きました。富田理樹君は、当社大総代横瀬町の富田孝様のお孫様であり、富田家から毎年提供される水田において例年六月に斎行されます神饌田御田植祭には、毎年参列され、祭典終了後に行われる実際の田植えにもご奉仕戴いております。

「柞祖霊社」について

権欄宜 新井君美

神社神道の基本理念を示す言葉に「敬神崇祖」という表現がある。文字通り、神を敬い祖先をあがめ尊ぶということである。

この言葉の根底には、人の命は不滅であり、祭を通じて次代へと繋がり、やがて家の守り神として、子孫の行先を守り導いてくれるという日本人の宗教意識があり、これに由来するものと言えるだろう。

明治初年の神仏判然令以降、神葬祭の普及と相俟って各地に祖霊社が祀られるようになったが、当社が秩父地方の総社であり、旧国幣小社に列するなど、極めて公的な性格を有していたことなどから、遂に祖霊社を建立するには至らず今日に至っていた。



穂高神社 御本殿

昨今の人心の荒廃が、家庭祭祀の衰退に淵源するものという観点から、あらためて祖先祭祀の重要性に鑑み、平成九年より葬儀や御霊祭などをご奉仕させて頂いたご遺族を招き、春秋の彼岸には合同慰霊祭を営むなどしてきたところであるが、今般、多くの皆様のご理解とご賛助を賜り、懸案の祖霊社建立を実現する運びとなった。

その御社殿は、長野県安曇野市に鎮座の古社、旧国幣小社・穂高神社(宮司・小平弘起氏)が二十一年に一度斎行する式年造替遷座祭に伴う旧神殿遺構を用材に譲り受け、そのご神縁を蒙りつつ然るべき改修を施して建立したものである。穂高神社の旧神殿が県外に払い下げられることは極めて異例であり、本事業へのご理解と格別のお取り計らいによるものであったと言えよう。

その他にも、平成十七年に帰幽された故千嶋文曹翁命が生前に奉納された祖霊社の建設基金をはじめ、当社大総代、更には立正佼成会秩父教会のご有志をはじめ、篤志の皆様よりお寄せ頂いたご浄財あつてのことと、衷心より厚く御礼を申し上げます。

散る花を惜しむ心やとどまりて

また来む春のたねになるべき

西行法師 詠歌

花と言えば桜。私も日本人にとつて桜は単に春に咲く花ということにとどまらず、その散り際の美しさなどから人の命と重ね合わせて、様々な思いを巡らせてくれる。



手水舎

東京の開花宣言は、靖國神社境内の桜の開花を基準としてしていると聞いている。かつて戦塵に散り、戦火に倒れた数多くの戦没者が祀られる靖國神社も、昭和二十年の終戦より六十四年目の夏を迎えることになる。

祖国のために尊い命を捧げられた英霊の御霊は永くこの国土にとどまり、子孫によって営まれる真摯な鎮魂の祈りを通じて、日本人の行く末を守り導いて下さるという伝統的な宗教意識に由来する祭が靖國神社では綿々と営まれてきた。

桜の花を惜しむ心、そこには祖先の御霊を永くとどめ祀り続けることにより、巡り来る次代に春の花を咲かせ、子孫の心の中に種を播き続けたいという願いが込められていると思う。

桜の花を惜しむように、祖先の御霊を惜しみ慕う心は人の道の基である。各家庭それぞれ心の御霊舎奉斎に併せて、境内に鎮まる祖霊社にも亡き人々の御霊を奉斎し、ご遺族をはじめ縁者の方々と共に郷国の「命」持ちとして、その御霊を永く祀り続けることは、私も神職に課せられた責務であらう。

この「柞祖霊社」の社名は、当社の社叢に古く伝わる名称「柞の杜」に由来するものである。
ブナやナラなど、関東地方に天然植生として古くから森を形成してきた落葉広葉樹を総称して、「柞(ハハソ)」と呼ぶわけであるが、当地方では「父の実の秩父の里、母果葉の柞の杜」と詠んで、父母のイメージと重ねてこの森のことを伝えていく。祖先の御霊を祀るには最も相応しい社名であると思う。森の地下深く、昏々と流れ木々に潤いをもたらす武甲山の伏流水の恵みの如く、私どもの心にも時を超え、豊かな潤いと安らぎを与えてくれる境内社として永く祀り続けて参る所存である。



大鳥居・春日灯籠

梟だより



◆「良縁特別祈願祭」開催

当社の例大祭「秩父夜祭」は武甲山の男神様と当社御祭神の女神様(妙見さま)が年に一度、お花畑を斎場に逢瀬を結ぶお祭りとして知られ、良縁の御神徳を授かりに全国から多くの方々にお参り戴いております。

この度、毎年恒例となっており、まず婚礼展にあわせ第一回の「良縁特別祈願祭」が斎行されました。良縁を求め、新しい出会いを希望される方々を募ったところ、氏子崇敬者をはじめ遠方からもお集まり戴き、神前祈願終了の後「出会いの広場」として参列した男女各々が自己紹介を交えながら歓談し、神苑でのひと時を過ごされました。お宮でのご縁から一生のご縁へと繋がることをお祈りし、当社ではこれからも多くの方々に良縁が授かりますよう努めてまいります。

次回、良縁祈願祭を10月24日に予定致しております。詳細を希望する方は社務所までお問い合わせ下さい。

◆氏子青年会勉強会

七月七日当社参集殿機ノ間を会場に、恒例の氏子青年会主催による



る勉強会が開催されました。

今回は、当社職員守屋権禰宜が講師を務め、まず川瀬祭の斎場で奉納される代参宮御神楽を秩父神社神楽師の皆さんにより実際に演奏披露されました。

大変珍しいこの神楽は、二人の素面の舞神が、右手に鈴、左手に扇を持ち両者対称に舞い、川瀬夏祭と例大祭の夜祭の斎場でのみ奉納される祭式神楽で、当社神楽の古風を遺す代表的な舞いであります。

また、講義では夏祭りの歴史や御祭神の特徴そして参拝作法など詳しく紹介され、出席した方々も大変有意義な時間であったと感想を戴いております。

◆秩父神社妙見講

自 平成二十一年 二月
至 平成二十一年 六月

二月二十六日 宮側講

長谷川正雄講元外六十四名

四月 二十日 皆野妙見講

豊田又工講元外二百九十六名

五月 一日 上蔭田妙見講

新井孝良講元外三十七名

五月 十日 近戸講

鳥塚金男講元外百五十七名

五月 十六日 原谷講

中西貞夫講元外四百八十三名

五月三十一日 中宮地講

新井喜代司講元外二百二十名

六月 七日 熊木講

高畑芳久講元外二百二十二名

六月 十三日 下宮地講

村山勇治講元外七十六名

六月 十三日 別所講

浅賀嘉友講元外九十一名

六月二十七日 日野田妙見講

荒船啓介講元外二百三十四名

六月二十七日 本町講

守屋英雄講元外百名

六月二十八日 下郷講

松澤一雄講元外四百十三名

本年より下郷講 松澤一雄様が新に講元に就任されました。どうぞ宜しくお願い致します。

◆柞乃杜神前結婚式報告

秩父市下影森	山中公太・麻衣子様
館林市大街道	齋藤宏行・みゆき様
秩父市中村町	新井雄大・彩花様
横瀬町横瀬	柳原秋博・翠様
小鹿野町向神	新井徳英・寿美様
秩父市山田	磯田哲也・貴子様
秩父市桜木町	若林広訓・和枝様
志木市本町	鈴木泰生・莉香様
狭山市狭山台	石井大六・素代様
秩父市中村町	嶋崎潤・綾香様
飯能市山手町	清水信男・直子様
秩父市大滝	木村範雄・知美様
秩父市荒川白久	高野泰広・絢華様
横瀬町横瀬	池田慎・恵美様
アメリカ	クハ・リ・千尋様
秩父市山田	大橋聡・敦子様
秩父市野坂町	山中俊之・紀子様
アメリカ	ビヤリ・タ・未来様
秩父市東町	井上洋・芳美様
秩父市日野田町	松井孝裕・深雪様
横瀬市戸塚区	堀豊・真里子様
秩父市本町	松崎功太・友加様
秩父市下影森	大野徹・美里様
新潟県中央区	杉山浩之・江美子様
未定・幸せなご家庭をお築下さいますようお祈り致します。	

◆職員辞令

禰宜 新井直行 神職身分二級上昇級
(三月十日付)
巫女見習 神塚有里恵 巫女を命ず
内田結香 巫女を命ず
(四月一日付)



「明治天皇月次御製」
六曲一双屏風奉納

この度、柞祖霊社創建に際しまして、秩父市桜木町に在住の富田光之助様より、正二位東郷平八郎伯爵謹書による「明治天皇月次御製」六曲一双屏風を奉納いただきましたのでご報告致します。

明治天皇 御製 十二月月内

一月 春風もふく心地してあらたまの
東の初日ににはほ梅かな

二月 萌えいでし二葉の小草寒からむ
見えざるまで露のふれば

三月 花になり實になる見れば草も木も
なべて務のある世なりけり

四月 空たかくあがるひばりの声なり
すみれ咲く野を人にゆづりて

五月 ふる雨に小笠とりどり賤の男が
みなくちまつる小田の苗代

六月 白鷺のおりたつ方も見えぬまで
池のはちすはしげりあひけり
正二位伯爵東郷平八郎謹書(花押)

七月 年々に思ひやれども山水を
くみて遊ばむ夏なかりけり

八月 夏の夜もねざめがちにぞ明かしける
世のため思ふこと多くして

九月 はぎの戸の露に宿るつきかけは
賤が垣根もへだてざるらむ

十月 むちうたば紅葉の枝にふれぬべし
駒をひかへて同ごえの道

十一月 ふくる夜のしもふむ人もあるものを
ひをけにのみやよのあかすべき

十二月 雪にたへ嵐にたへて後にこそ
松のくらのも高く見えけれ
大正十三年二月 正二位東郷平八郎伯爵謹書(花押)

◆境内さくら草展示

今年桜草展も二十五回を迎え、秩父さくら草会代表 神林清一様よりご挨拶を戴きましたので掲載いたします。わが国は草も桜を咲きにけり(一茶)



桜草を見事にとらえた一句です。かつて野山に自生していたこの花も絶滅の危機に瀕しています。この花が江戸時代に改良を加えられ園芸品種として高い園芸文化を礎いて来たことはあまり知られていません。今、江戸文化の素晴らしさに光があてられていますが、桜草についても同様です。

この花に魅せられて三十年、初めて秩父神社に飾らせて戴いたのが昭和六十年五月、二間の五段飾りにして八十鉢程度展示致しました。それから二十五年が経ち、昨年秩父地区で桜草を栽培している方々と「秩父さくら草会」を設立。今年

は八間の展示棚を製作し、お陰様で大盛況でした。

会員の桜草にそぞろ愛情の深さをみますと更に充実した展示会が出来ると確信致します。



編集後記

■ここに社報柞乃杜第39号川瀬夏祭号をお届け致します。

■まず、この度の社報で、柞祖霊社の完成写真がお届けできませんでしたこととお詫び致します。

■さて、神社解説の中で紹介した張鷟は、天の川(千世)を旅してきた人物であることをご紹介しました。これに関連して、今年は天文の世界でも、大変記念すべき年を迎えております。

川瀬祭りの翌々日7月22日、昭和38年7月21日(北海道東部観測)以来46年ぶりに、日本の国土(トカラ列島・奄美大島北部・屋久島など)で皆既日食が観測される日を迎えます。

この日食の期間、空は朝焼け・夕焼け程度の暗さとなり、明るい星々であれば見えるかもしれないと言われています。

この機会を逃すと、次は26年後たそうです。興味ある方はお見逃し無く、ちなみに次回観測場所は、北関東で見ることが出来るそうです。



※本報の用紙は再生マツト紙を使用しています

平成二十一年(二〇〇九)七月二〇日

編集 秩父神社社務所

〒360-0801 埼玉県秩父市番場町一三

TEL 〇四九四-二二一〇二六二

FAX 〇四九四-二四一五五九六

印刷所 有限会社 誠文社印刷所

〒360-0804 秩父市東町二七七八